子ども健康と環境に関する全国調査（エコチル調査）
論文概要の和文様式

雑誌における論文タイトル：

Maternal antibiotic exposure and childhood allergies: The Japan Environment and Children's Study

和文タイトル：

妊娠中の母親の抗生物質使用と小児アレルギーとの関連：エコチル調査

ユニットセンター（UC）等名：千葉ユニットセンター
サブユニットセンター（SUC）名：

発表雑誌名：Journal of Allergy and Clinical Immunology: Global
年：2023　　DOI：10.1016/j.jacig.2023.100137

筆頭著者名：大越　幸太
所属 UC 名：千葉ユニットセンター

目的：

本研究では、妊娠中の抗生物質の使用と生まれた子どもの 3 歳までのアレルギー性疾患の発症との関連を明らかにすることを目的とした。

方法：

妊娠中の抗生物質使用については、質問票及び医療機関における記録を用いて調べた。妊娠中の抗生物質使用と子どもの 3 歳までの就学前喘息、喘鳴、アトピー性皮膚炎、湿疹、食物アレルギー、アレルギー性鼻結膜炎のそれぞれ、またはこのうちいずれかのアレルギー性疾患の発症との関連について、ロジスティック回帰分析により評価した。また、これらの関連に対する抗生物質のばく露時期、子どもの性別、母親のアレルギー性疾患罹患歴の影響を評価した。

結果：

母親の 28.5%が妊娠中に抗生物質を使用していた。妊娠中の抗生物質使用は、子どもの 3 歳までの就学前喘息、喘鳴、アレルギー性鼻結膜炎のそれぞれのリスク増加に関連し、また、少なくともいずれかのアレルギー性疾患を有することとも関連することが示された。一方で、アトピー性皮膚炎、湿疹、食物アレルギーとの関連はみられなかった。また、これらの関連に対して、抗生物質のばく露時期、子どもの性別、母親のアレルギー性疾患罹患歴は明確な影響を示さなかった。

考察（研究の限界を含める）：

妊娠中の抗生物質使用は喘鳴、喘息、アレルギー性鼻結膜炎のリスクを高める可能性があることが示された。しかし、この結果は、妊娠中の治療上必要な抗生物質の使用を妨げるものではない。
本研究の限界として、抗生物質使用は、参加者の質問票への回答に基づいた情報があり、正確に捉え切れているとは言えず、抗生物質の種類、投与量、投与期間についての情報は得られていない。また、アレルギー性疾患の評価は、質問票に基づいており、客観的な評価は行っていない。妊娠中の抗生物質使用が小児のアレルギー性疾患に与える影響を正確に評価するためには、抗生物質の使用状況やアレルギー性疾患を客観的に調査した研究が必要である。

結論：

本研究の結果から、妊娠中の抗生物質使用が子どものアレルギー性疾患発症に影響を与える可能性があることが示唆された。